

展示事業と調査研究に関する相関表

館名：京都国立近代美術館

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
14	共催展	「アメリカ現代陶芸の系譜1950ー1990 自由の国のオブジェとうつわ」	14.7.30-9.1	アメリカの現代陶芸に関する調査研究(愛知県陶磁資料館等との共同研究)	アメリカと日本との陶芸の交流は、戦後、浜田庄司らが渡米し、日本の状況を知らせたことが契機となり、以後、陶芸に伝統のないアメリカから多くの作家が日本に学びに来た。それらの作家は、単に日本の影響関係で語り尽くせるものではなく、アメリカで興った様々な芸術運動と呼応して制作が行われた。つまり、伝統を重視するだけではなく新しい作品の創造が行われたのである。故に、この展覧会は戦後のもっとも活動的であったアメリカ現代陶芸の1950年ー90年までの40年間を調査研究した展覧会であった。アメリカ美術の紹介や研究は今まで多くが行われたが、陶芸に関しては我が国において網羅的に紹介されるアメリカの現代陶芸としては初めての展覧会であった。(担当:松原龍一)	日本経済新聞社
14	特別展	「クッションから都市計画までーヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟:ドイツ近代デザインの諸相1900ー1927」展	14.11.2-12.23	ヘルマン・ムテジウスに関する研究	展覧会では、本研究で初めて包括的な調査がなされたムテジウスの日本滞在について様々な資料が紹介され、研究成果は展覧会カタログに論文として掲載された。また、本展覧会で紹介された世紀転換期からバウハウスにいたるドイツ近代デザインの作品・資料は、本研究の過程で調査吟味されたものであり、ほとんどが日本で初公開されたものであった。(担当:池田祐子)	財団法人堂本印象記念近代美術振興財団 国際シンポジウム「ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟ーその歴史的位置づけと現代的意義をめぐって」(2002.11.2、於立命館大学):京都国立近代美術館・立命館大学産業社会学部・関西ドイツ文化センター共催
15	テーマ展示	「東松照明の写真1972ー2002」展	15.3.13-16.4.18	東松照明に関する調査研究	ドキュメンタリー写真の巨匠として知られる東松照明だが、1972年以降のカラー写真については十分な分析と歴史的評価を加えられていない。東松のカラー写真の芸術的意義と創作の展開を解明するため、1972年以降のカラー作品の全てを調査、6つの重要なシリーズを取り上げた。これらを一括して紹介する大展覧会とはあえてせず、1シリーズ30-70点の小規模展示を約一カ月の期間で6回、一年間にわたって開催した。反復された展覧会により各シリーズの作品の深みと、全体を貫く作者の創作姿勢を鮮明に示すことができた。実験的展示手法として広い層からの支持を得ることができた。(担当:河本信治)	

年度	区分	展覧会名	開催期間	関連する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
15	共催展	「韓国国立中央博物館所蔵 日本近代美術展」	15.5.20～6.29	韓国国立中央博物館所蔵の近代日本美術品についての同館との共同研究	・日本の敗戦後は、一度も公開されておらず、韓国で近代日本画の研究者がいなかったこともあり、個々の作品の調査が殆どなされていなかったが、今回の共同研究により、ある程度の基本的なデータを埋めていくことが出来た。 ・調査の結果、現在では名前や作品が忘れられている、戦前に亡くなった官展画家達の作品が多く含まれていることが判明し、これ等の画家の仕事の見直しに役立った。ご遺族の追跡調査を併せて行ったので、新しい情報や、資料を提供していただくことも出来た。 ・旧李王家コレクション展は、韓国でも開催されたが、これを機に、それまで無視されてきた近代日本美術史を研究するようになり、今年韓国現代美術館で開催されている、韓国の近・現代美術を紹介する韓国美術の100年展には、本展で展示された作品のいくつかが出品されている。また、日本での開催館であった、東京藝術大学と当館に作品の貸し出し依頼があり、本展は、近代美術においても自由に相互研究できる基盤を整えることに役立った。(担当:内山武夫、島田康寛、松原龍一、小倉実子)	韓国国立中央博物館、朝日新聞社、NHK京都放送局、NHKきんきメディアブラン
15	企画展	「横尾byヨコオ:描くことの悦楽ーイメージの遍歴と再生」展	15.7.8～8.17	横尾忠則の総合的研究	40年間にわたって制作された膨大な数の横尾作品を再調査し10の類型に分類、これらのイメージ原型が周期的に反復される創作パターンを抽出した。これらイメージ原型が連鎖的に繋がり反復されて作品となる状況を展示会場で再現し、横尾芸術解釈に新しい視点と、時間軸に添った常套的な展示ではない、斬新な展示手法を実現することができた。(担当:河本信治)	
15	共催展	「神坂雪佳展ー琳派の継承・近代デザインの先駆者」	15.8.30～10.13	神坂雪佳の総合的研究(アメリカ・バーミングハム美術館との共同研究)	・展覧会では、バーミングハム美術館との密接な協力により、海外に流出した作品を含む、数多くの作品が再調査され紹介された。京都の美術・工芸界を中心に、絵画作品から、陶磁器、漆器、染織、図案などジャンル横断的な雪佳の活動の紹介と、それについての研究は、当館の特色を最も良く反映するものでもあった。またバーミングハム美術館との企画段階からの協力体制は、展覧会の海外巡回をも可能にした。(担当:池田祐子) ・ご遺族が所蔵されていた資料類や、当時の美術雑誌を調査し、これまでの画集に掲載されていたものより、更に詳しい年譜を作成した。また、作品調査の過程で発見された渡欧日記から、そのおおよその足取りが判明した。(担当:小倉実子)	バーミングハム美術館(米国)、朝日新聞社共催:バーミングハム美術館(米国)・朝日新聞社、展覧会巡回先:佐倉市立美術館、ロサンゼルス・カウンティ美術館、バーミングハム美術館(米国)

年度	区分	展覧会名	開催期間	関連する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
15	特別展	「ヨハネス・イッテンー造形芸術への道」展	15.10.21-11.30	ヨハネス・イッテンに関する調査研究(スイス・ベルン美術館との共同研究)	スイス・ベルン美術館内のヨハネス・イッテン財団によって提案された展覧会「ヨハネス・イッテン 造形芸術への道」を第1部として、美術教育者として知られるイッテンの指導内容を、主に指導を受けた学生たちの作例によって指導方法別に呈示し、実作によって展覧会というかたちではじめて実現したことは、新たな紹介方法として意義深いものであった。さらに、日本での巡回に際しては、これまでヨハネス・イッテンについては、まとまった画集の出版もなく、ほとんど作品が紹介されてこなかった現状を鑑みて、第2部としてイッテンの作品80点を集め、回顧展的な意味合いを含めるとともに、イッテンがとりわけ日本の美術教育や東洋の芸術とも関係が深かったことを考慮して、第3部として「イッテンと日本」という章をさらに追加して、よりイッテンの全体像が日本人にとっても身近に理解されるよう配慮した。この展覧会は、近年活発な動きを示してきている「美術館と美術教育」というテーマを再考する上でも、貴重な事例となったと思われる。(担当: 山野英嗣)	東京国立近代美術館
15	共催展	「デカダンから光明へ 異端画家 秦テルヲの軌跡ーそして竹久夢二・野長瀬晩花・戸張孤雁・・・」展	15.12.9-16.1.25	秦テルヲの総合的研究(笠岡市立竹喬美術館との共同研究)	・これまでは、大正初めの退廃的な画風の作品しか知られることがなかったが、瓶原に移ってから繊細で明るく穏やかな画風の作品や、京都市内に戻ってから独特な仏画などを多数紹介することが出来、テルヲに対するイメージが豊かになった。 ・今まで本格的な回顧展が開催されることがなかったため、作品とともに、周辺資料の発掘を丁寧に行った結果、作品理解に不可欠なその生涯をかなり明らかにすることが出来た。 ・展覧会を開催したことにより、埋もれていた作品情報が寄せられ、絶筆と言われる作品も見つけることができた。これ等の作品は、これまでに明らかになったテルヲの総てを紹介するという本展の主旨に鑑みて、公開すべきであると判断し、会期中、随時、追加展示するようにした。 ・テルヲの全体像は、本展で初めて明らかになったのであり、本格的な研究はこれから活発に行われるものと考えられる。今後の研究に役立つよう、当館にご遺族からご遺贈いただいた、テルヲ自身が所蔵していた自作や個展に関する資料類と日記、そして神戸や京都の地方紙から拾い集めた当時の展覧会評など、個人では集めにくいと考えられる資料を可能な限り図録に収載した。(担当: 島田康寛、小倉実子)	日本経済新聞社、京都新聞社

年度	区分	展覧会名	開催期間	関連する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
15	企画展	「彫刻家 堀内正和の世界展」	16.3.13-4.18	堀内正和に関する調査研究(神奈川県立近代美術館との共同研究)	・日本を代表する抽象彫刻家の没後初めてのまとまった回顧展として、堀内正和の彫刻の全貌を紹介することができた。 ・これまで紹介されることがなく、知られることの少なかった多くのペーパー・スカルプチュアを合せて展示し、彫刻とペーパー・スカルプチュアの関係を初めて明らかにした。 ・遺族のもとで作品調査を重ね、展覧会后、遺族から彫刻と版画の寄贈を受けた。 ・充実したカタログも高く評価され、尾崎の論文は美術館連絡会議図録奨励賞を受賞した。(担当:尾崎信一郎)	
16	共催展	「COLORS ファッションと色彩-VIKTOR & ROLF & KCI」展	16.4.29~6.20	ファッションと色彩についての総合的研究(KCIとの共同研究)	当館が5年ごと、25年間継続しているファッションに関する研究・展示の最新の成果の発表である。1999年の「身体 of 夢」展で切り拓いたファッションと社会や他分野との幅広い関係性の問題をさらに継承発展させ、5年間にわたる研究成果を「色彩」という枠組みの中で、一般観衆も体験的に楽しめる展示環境を実現した。学際的研究成果をエンターテインメント的空間に視覚的に実現した展覧会として、高い評価を得ることができた。(担当:河本信治)	
16	共催展	「近代日本画壇の巨匠 横山大観展」	16.7.2~8.8	横山大観についての調査研究	・大観展は何度も各地で開催されているが、最近では出品される作品はだいたい固まっていた。そこで、もう一度関西を中心に、埋もれている作品がないか調査を行い、初公開あるいは数十年公開されていないという作品を発掘、展示した。 ・大観というと、豪放な一面が強調されがちであるが、作品調査を行なううちに、意外に繊細な一面があることに気付いた。そして、その両面があったからこそ、明治、大正、昭和と多くの人々にその作品が支持されてきたのだと考え、今展では、従来の大観展ではあまり拾い上げられなかった、繊細な一面を見ることができる作品も紹介するようにした。また、解説を行なう時は、その点を特に取り上げるようにした。(担当:島田康寛、小倉実子)	朝日新聞社

年度	区分	展覧会名	開催期間	関連する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
16	共催展	「没後25年 八木一夫展」	16.9.28～10.31	八木一夫と現代陶芸についての調査研究(岐阜県現代陶芸美術館ほかとの共同研究)	陶芸の世界に新しい造形分野を切り開き、海外からも注目された八木一夫の没後25年に当たり、初期から晩年までの陶芸作品約300点によりその業績を回顧する展覧会であった。八木一夫は1918年京都に生まれ、戦後間もない1946年、「青年作陶家集団」を結成して新しい陶芸を目指したが、2年後にはこれを解散し、鈴木治らと陶芸集団「走泥社」を結成した。また、イサム・ノグチのテラコッタやピカソの陶芸作品にも触発され、前衛的な陶芸を旨とするようになり、1954年に発表した作品『ザムザ氏の散歩』でロクロを用いながらも器形を捨てた後、陶芸の概念を破った新造形を展開した。以後、焼成の偶然性を避けた無釉の焼締による力強いオブジェ作品を経て、黒陶という無機的で彫刻に近い表現が可能な手法により、造形的に一層の飛躍を果し、美に対する鋭い感覚と深い知性を備え、まれに見る才能を示した。1917年突然の死で、こうした作品制作は断たれたが、現在でも陶芸界においてその評価と影響は計り知れないものがある。没後25年に当たり、遺族所蔵の資料や美術館の使命である調査研究により、新しい資料や行方不明であった作品など多くの新成果が得られ、八木一夫ならびに現代陶芸や工芸、さらには美術の研究にも大きく貢献できたことは良い点であったと思う。本展は、当館が中心に企画構成し、全国の公立4美術館に巡回した。(担当:松原龍一)	日本経済新聞社、NHK京都放送局、京都新聞社
16	企画展	「ジャパニーズ・モダン ―剣持勇とその世界―」展	16.10.8～11.3	剣持勇とインテリアデザインについての総合的研究(松戸市教育委員会美術館準備室との共同研究)	日本のインテリアデザインのパイオニアであり、日本の美意識を「ジャパニーズ・モダン」という言葉で世界標準にまだ広めた剣持勇の没後はじめての回顧展となった。その重要な貢献にもかかわらず現存する実作品が少なく、作品の調査発掘に時間が費やされたが、創作の全貌を知るに十分な作品を確定できた。また戦前の剣持の活動、ドイツ人建築家ブルーノ・タウトとの交流、日本の工芸デザインの近代化に果たした剣持の役割など、あらたな重要な資料の発見もあり、日本の近代デザイン史の欠落部分を埋める貢献を果たした。(担当:河本信治)	

年度	区分	展覧会名	開催期間	関連する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
16	特別展	「痕跡－戦後美術における身体と思考」展	16.11.9～12.19	戦後美術の世界的動向についての調査研究	・三度にわたる海外調査の結果として初めて可能となった展覧会であり、これまで日本で紹介されたことのなかった多くの作家や作品を展示し、斬新な視点から戦後美術を検証する展覧会となった。 ・国内でも調査を進めた結果、美術館に収められながらこれまでほとんど紹介されることがなかった重要な作品を多く展示に加えることができた。また九州派など地域性のゆえに長らく無視されてきた重要な動向にも光を当てることとなった。 ・展覧会の企画に当たっては、海外の美術史家との交流を続け、カタログに海外の一流の美術史家や批評家から寄稿された論文を掲載することができた。 ・問題意識に富む展覧会として新聞や美術雑誌だけでなく、文学や演劇、フェミニズム関係の雑誌にも取り上げられ、この種の展覧会としてはまれな大きな反響を得た。(担当:尾崎信一郎)	東京国立近代美術館
16	共催展	「京都国立近代美術館所蔵－川勝コレクションの名品 河井寛次郎展」	17.2.22～4.3	河井寛次郎についての調査研究	1890年、島根県安来市に生まれ、1920年京都五条坂で鐘溪窯を開窯し、生涯作陶を続けた河井寛次郎陶芸の全貌を紹介する展覧会である。初期の中国や朝鮮の古陶磁の手法を逐った作品や柳宗悦と出会って繰り広げられた中期の民藝作品、後期の自由な造形を追い求めて制作した作品などで寛次郎の世界を紹介するものであり、出品する作品は、1921年、寛次郎に最初に会ってから1966年没するまで最大の理解者で後援者であった故川勝堅一氏が、寛次郎とともに作り上げたコレクションの中から、当館に寄贈された425点の優品のうち約250点で陶工河井寛次郎の世界を展観した。このコレクションについては、寄贈された時から研究がされ、折々に新事実を加えていくという当館にとっては連続して行っている調査研究である。今回は、特に寄贈者の川勝氏と寛次郎の交友関係を詳しく調査研究し公開した。(担当:松原龍一)	京都新聞社